献　辞

人文学の危機が叫ばれて久しい。

私たちは、今、現代社会において人文学がどれだけ実際的な価値を帯び、どれだけ社会的な役割を果たしているのかという厳しい疑問を突きつけられている。この問いに対して明快な答えを出すことは困難だが、いずれにせよ、人文学全体が未曾有の危機にあることはまぎれもない事実である。原因の一つに、人文学全体に対する社会全体の関心の希薄化が挙げられる。しかし人文学の研究にいそしむ私たちは、そうした趨勢にただ手をこまねいているだけではだめである。なぜなら、私たちは事実、言語や教養というかけがえのない教育に従事しているからである。したがって、教育への知的な還元という意味を忘れたなら、私たちの人文学研究それ自体が、元も子もなくなるにちがいない。一見、教育と研究との間には大きな溝が立ちはだかっているように見えるが、じつは、優れた教育力は、研究者としての高い理想と不可分である。そして研究とは、何より、その具体的な成果に辿りつくまでの知的な全プロセスを意味し、そのプロセスにおける自己との対話のうちに、教育現場での学生との対話を生み出す原動力となるものが潜んでいる。

さて、名古屋外国語大学外国語学部紀要は、本号をもって記念すべき第50号を迎える。第1号の刊行は、1989年であるから、まさに本学の歩みとともに歴史を重ねてきたといっても過言ではない。本紀要は、その性質上、他大学の紀要や論叢などと同様、けっして対外的な華やかさに溢れるものではないが、アカデミズムの伝統と精神だけはしっかりと守り、ささやかながらも世界の学術に貢献してきたと自信をもっていえる。また、2005年2月に刊行された第29号以降は、「竹の庫　学術情報リポジトリ」としてオンラインでも一般市民、外部の研究者にも広く開放されることになった。喜ばしい限りである。

周知のとおり、本学は、1988年に、英米、フランス語、中国語の3学科からなる外国語学部一学部としてスタートした。それ以来、国際経営学部（その後廃止）、大学院国際コミュニケーション研究科、日本語学科などを加え、2004年には、現代国際学部（現代英語学科、国際ビジネス学科）が新たに誕生した。その後、英語教育学科、国際教養学科、そして2015年には、世界教養学科の新設と着実に拡大の歩みを遂げており、2015年度には、外国語学部全体に新しい教養教育のシステム（世界教養プログラム）が導入されている。問題となるのは、「世界教養」（World liberal Arts）の理念である。私の考えに従えば、「世界教養」とは、世界の多元性、多文化性に立脚した21世紀型の「外国学（foreign studies）」である。「外国学」は、本来、地域文化研究という名に置き換えられるべき何かだが、そこでは、世界諸地域の言語、文化、歴史、社会に関わる総合的な学がイメージされており、総合的であるがゆえ、リベラルアーツとしての側面をも併せもっている。本紀要が、今後、外国語学部紀要という名称を冠していくにせよ、内容的には、「世界教養」の名にふさわしいテーマやトピック面での広がりを持つことが期待される。世界諸地域の文化への目配りと、先鋭な問題意識、より広い地域性、領域横断的な知的冒険など、期待は尽きないが、つねに教育現場への還元という視点を忘れることなく、社会的にも大いに誇りうる論文を一つでも数多く世に送り出すことができたら幸いである。

2015年10月　　学長　亀山郁夫